

## 平成30年度ユニバーサルデザイン（UD）教育の取組

1 学校名	白石町立有明西小学校		
2 所在地	佐賀県杵島郡白石町戸ケ里1493番地1		
3 校長名	橋本 幸雄		
4 学級数 児童生徒数	8学級 144人	5 実施学年 児童生徒数	全学年 144人

### 6 取組のねらい

UD（ユニバーサルデザイン）推進校の取組を見たり、自分たちにできるUDの取組について考えたりする学習を通して、老若男女の違いや、健康、障がいに関係なく、全ての人が幸せに暮らせる世の中にしたいと願う児童を育てる。

### 7 取組の実際（「全校」「2年生」「4年生」の取組を重点的に記載）

（1）全校児童でUD推進校の取組を見て、UDについて考える。

#### ① 嬉野高校の説明を聞いて（全校）



嬉野高校生によるUD講演会

社会福祉系列コースに通う3年生6名に来ていただき、UDとはどういうものなのか、紙芝居や劇を通して教えていただいた。UDとは、「みんなが使いやすいもの」というキーワードで説明されていた。子どもたちは、高校生の笑顔や、ソフトな言葉遣いにも感心し、UDには、心も大事だということを理解することができた。

#### ～子どもたちの感想より～

わたしは、心のユニバーサルデザインをがんばろうと思いました。おとしよりのかたなどがいたら、手伝ってあげようと思いました。自分からすすんでこえをかけたりしてあげて、思いやりの心をもっていようと思いました。（2年）

ぼくは、きのうUDでいろいろなことを学びました。じこしょうかいのときの手話が、耳が聞こえない人のやくに立つのは、本当にすごいと思いました。シャンプーのでこぼこも、目を閉じているときや目が見えない人にやくに立ちます。（3年）

わたしは、UDを聞いて、2年生の頃骨折したことがあったので、「UDは、役に立ちそうだなあ。」と思いました。お年寄りや目の不自由な人、おなかに赤ちゃんがいる人はたくさんいると思うので、一人でも多くの人にUDが役立つといいなあとと思いました。（4年）

ぼくは、UDの紙芝居を見て、お年寄りの人には優しくした方がいいと思いました。なぜなら、優しくした後は、気持ちがいいからです。もし、ぼくが席に座ってお年寄りやおなかに赤ちゃんがいる人が来たら、席をゆずってあげたいと思います。ぼくもお年寄りになってそんなことをしてもらったら嬉しいからです。（5年）

体が不自由な人にとって、一番使いやすいものにすることがUDだと分かりました。ぼくもしてみただけで、とっても使いやすく、ぼくがもし目が見えなくなってもUDの道具なら楽に使えます。ぼくも体が不自由な人が喜ぶような道具を作ってみたいです。(6年)

## (2) 自分たちにも取り組めるUDについて考える。

### ① 老人会との交流を通したUD (全校)

白石町内の全小中学校は、コミュニティ・スクールを推進している。本校ではその一環として、地域に出かけ、お年寄りと交流する「出前発表会」を行った。この出前発表



老人会でダンスを披露する2年生

会の目的は、「お年寄りも自分たちも楽しめる出し物をする」「みんなが使えるもので遊ぶ」という、2点で、UDとのねらいとも重なっている。

「お年寄りも自分たちも楽しめる出し物をする」では、体育の時間に学習したダンスを披露し、お年寄りに喜んでもらえることができた。「みんなが使えるもので遊ぶ」では、誰でもできるじゃんけんをし、お年寄りが勝ったら、肩もみを2倍にするというルールであった。

ほとんどの地区の老人会とUDの目的で交流することができた。お年寄りも子どもたちもとても楽しむことができ、来年も是非、来てほしいという要望が強かった。

### ② UD啓発活動 (2年生)

2年生は、けん玉で遊ぶ児童が多い。そこで、県内外のけん玉先生(けん玉ボランティア)を呼び、身体が不自由な人でもみんなが楽しめるけん玉遊びを考えることにした。



車いすに座ってけん玉をする2年生

「足が不自由な人が、けん玉を上手に使えると思うか?」と、事前アンケートを取った。19%(5/26人)の子どもたちは、「上手にできると思う。」「まあまあできると思う。」と答えた。

足が不自由な人が、本当にけん玉を楽しめるのかどうか、車いすを使ってけん玉をしてみた。全ての児童が、「しにくかった。」という感想をもった。けん玉で大事な「膝を使えないから」うまくできなかったのである。そこで、足が不自由な人とでもけん玉ができる

遊びを、けん玉先生と一緒に考えた。考えた遊びは、4つ。「けん玉ピラミッド」(けん玉を積み重ねる)、「ごせんじゅうまい」(手を使わず玉を隣の人へ渡す)、「きんぎょ」(受け皿で玉をすくう)、「たいやきいっちょう」(玉を転がしてけんにさす)遊びであった。どれも、UDの目的に合う、「みんなができる」遊びとなった。

### ③ 手話活動（４，６年生）

４年生と６年生は、聴覚に障がいがある人とも交流できる「手話」に着目し、佐賀県聴覚障害サポートセンター手話通訳士の清田さんとボランティアの平原さんに来ていただいた。手話で『ともだち』の歌を教えてもらった。また、「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」の手話は、じゃんけんの「グー」「チョキ」「パー」を使えばいいことを教えてもらい、早速使っていた。

４年生は、嬉野高校生にもっと手話を教えてもらいたいと願い、１１名もの高校生に再び来ていただくことができた。高校生１人に４年生が２，３人という小グループで教えていただいたので、『ともだち』の歌の手話を完ぺきにすることができ、子どもたちは大変喜んでいて。この手話を覚えたことで、「老人会で発表したい」「福祉施設に行つて披露したい」「嬉野高校に入つて手話をもっと勉強したい」という声が聞かれた。



高校生から手話を教わる４年生

### ④ 「にしきえまつり」（２年生）

毎年、本校では、「にしきえまつり」という学習発表会を授業参観で行っている。２年生は、UDで学習したことと、国語や体育等で学習したことをもとに、ダンス劇にして発表した。踊りたい人だったら体が不自由な人もお年寄りもみんなで踊りたいと願い、ダンスを披露した。動きをゆっくりしたり椅子に座つてダンスをしたりと工夫が見られた。



誰でも踊れるダンスを披露する２年生

## （３）教師の視点でUD環境について考える。

### ① 全員が作業できる環境づくり

家庭的に支援が必要で、学習用具の準備等が不自由な児童がいる。そこで、各学年の実態に応じて、定規、コンパス、分度器など、必ず必要な道具を教室に用意し、学習に困らないようにしている。

### ② 学習に不自由さをなくす板書

人数が多く、しかも視力が低い児童が多い学年では、教室の後ろの座席から黒板の文字が見えにくくなることもある。そこで、席替えの時に配慮することはもちろんであるが、一番後ろの席からでも見えるような文字の大きさやチョークの色に気を付けながら板書をしている。

また、ワークシートを作成する際には、「全員が活動できるのか？」「活動できない児童には、どんな補足説明や補助資料を用意するのか？」という意識で取り組んでいる。

## 8 取組の成果と課題

### (1) 成果

今年度、UD教育推進校の指定を受ける前までは、UDという言葉は聞いたことがあっても、実際にどのようなものなのか、どのような活動をしたらよいのか、子どもたちはもちろん、指導者である教師もよく理解していなかった。嬉野高校生によるUD啓発活動の取組を実際に見ることで、UDとは、「みんなが使いやすいもの」という短い言葉ではっきりとイメージすることができた。また、心遣いや言葉遣いなど、「心のUD」も大切であることも共有化することができた。

様々な取組を通して、児童のUDに対する知識が蓄えられただけでなく、「みんなが使えるもの」という意識で、身の回りの環境に目を向ける児童が多くなった。子どもたちは、遊びの中でUD的思考を取り入れようと、ふれあいファミリータイム（本校縦割り班活動）を考えるきっかけとなった。教師も授業中の子どもたちに指示した活動が、「みんなができるのか？」という視点で考えるようになった。

校内には、アレルギー体質の児童が数名いる。毎日、その数名の給食はお盆や皿が違って、給食は除去食となっている。白石町食育推進事業で行った親子料理教室では、アレルギー物質を全く使わない料理であったために、全員が同じ給食を食べることができた。「みんなと一緒に食べられるのは、UDに関係しているかもしれません。アレルギーの人と一緒にみんなと同じものを食べられたからです。料理の先生たちが、みんなが食べられるようにレシピを考えてくださったので、今日は、親や友だちと一から作って食べることでできて楽しかったです。料理ってこんなに楽しいんだなあと、思いました。」と感想を書いた児童がいた。生活の中のUDに自然と目が向けられるようになってきた。



児童玄関前のUDコーナー

### (2) 課題

小学校で終わらせるのではなく、中学校、高等学校へといかに繋ぐか、小中連携を視野に入れながら活動を考えなくてはならない。また、同じ中学校へ通う他の2校とも、小小連携を考えなくてはならない。職員間の情報共有をいかに進めるのか、課題は多い。